

経済産業大臣指定伝統的工芸品

きしゅうしつき

紀州漆器

伝統マーク 昭和53年指定 / 指定された地域(和歌山市、海南市、紀美野町)

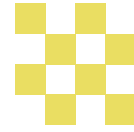
室町時代より継承されてきた漆器の産地

徹底した分業制を背景に、優れた職人技術と華やかな装飾美で、和歌山の一大産業へと成長した「紀州漆器」。中でも海南市黒江は、会津塗の福島県、山中塗の石川県と並び称される全国三大産地のひとつ。歴史は古く室町時代、近江系の商人がこの地に移り住んだことに始まります。長い歴史の中、常に人の暮らしに寄り添い、生活とともに発展してきました。



漆屋はやし漆芸家
●紀州漆器 伝統工芸士
林克彦さん

昭和36年生まれ、海南市出身。父、祖父と紀州漆器に携わり、跡継ぎとして京都へ。漆芸科の高等学校を卒業し、約10年間京都で修業の後、海南市に戻り、漆芸家の道を歩んでいます。専門は蒔絵。天然素材にこだわり、できる限り地元の木地を収集。ヒョウタンやミカンなど面白素材にも挑戦。「良いものを大事に長く使ってほしいから、職人は持てるすべてを作品に注ぎ込むのです。」



漆の活用は暮らしの道具の原点

「紀州漆器」はかつて「黒江塗」とも呼ばれた海南市黒江の主要産業のひとつです。ウルシノキから採れる樹液を補強剤として器に塗ったもので、古くは石器時代、接着や装飾に使われていました。紀州漆器として始まりをさかのぼると、起源は室町時代。近江系の商人集団が黒江に移り住み、豊富な紀州材を使って木椀を製造。次いで、椀木地に漆を塗る技法が加わり、漆工技術が発達してきました。江戸時代には一大産地として栄え、画期的な分業制も導入。着実に発展を続け、江戸時代には1200軒余りの漆器関係者が軒を連ねました。

誰もが気軽に楽しめる大衆漆器

紀州漆器を代表する根来塗にはじまり、金や銀の金属粉などを漆器に接着させて絵や模様を描く蒔絵、漆面に刃物で模様を彫り、金箔や金粉を押し込む沈金など、華やかな装飾を施した漆器の数々。英語では漆器のことを“ジャパン”と呼び、日本を代表する工芸品として知られています。しかし、日本でも日用品として漆器が大衆に広まったのは江戸時代。それでもまだまだ高級品。転機となったのは、昭和30年代に登場したプラスチック製漆器。新しい漆器製造法が、大量生産を可能にし、誰もが気軽に漆器を楽しめるようになりました。もちろん、この“大衆漆器”も伝統的漆器と同様、全国に紀州漆器の名を轟かすきっかけとなり、技巧を生かしながらの物づくりが今も変わらずに継承されています。

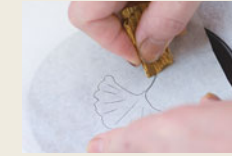


新たなニーズを発掘する取り組み

現在、紀州漆器で伝統工芸士の称号を所有しているのは、漆芸家の林克彦さんをはじめ4人。事業所は140軒余りで、約700人が紀州漆器に従事しています。10年前は200軒程で、約900人が働いていたといいます。「500年にもおよぶ壮大な歴史の中の一つを担う職人として、良いものを絶やすことなく、次の世代へ届けていきたいです。」と林さん。ライフスタイルの西洋化などで漆器製品の需要は減少傾向にあります。林さんらが加入している「紀州漆器協同組合」では、新たなニーズを発掘するため、漆器の技術を活用した取り組みやイベントも開催。中でも「紀州漆器まつり」は、県内外から約6万人が集まる恒例イベントです。

【蒔絵の制作工程】

分業制が確立されている紀州漆器。お盆や膳など、全体に漆を塗り付ける工程を「塗り」といい、塗り師が担当。加飾と呼ばれる工程に「蒔絵」や「沈金」があり、塗り師から蒔絵師、沈金師と職人の手に委ねられ、絵や模様が描画されます。それぞれが専門で、熟練の技が生かされています。



置目とり
塗り上がった漆器に、蒔絵で絵や模様を描いていきます。同じ絵柄をたくさん制作する場合には、紙に下絵を描いて転写します。



絵付け
次に下絵を漆でなぞり、金粉などを蒔く時の接着剤にします。漆を付け過ぎないように薄く塗ると、仕上がりが綺麗です。



ふるまき粉蒔
文字通り金粉などを蒔いて、絵や模様を浮かび上がらせます。漆が乾かないうちに作業。湿度を高めにした専用の室に入れて十分に乾燥。

風情漂う漆器の町並みにも注目

観光名所としても注目される黒江の町並み。珍しいのは、狭い路地に面してノコギリの歯のように建ち並ぶ建物。江戸時代の町家建築を代表する建造物で、風情のある落ち着いた、たたずまいが特徴です。町の中心には紀州漆器伝統産業館「うるわし館」。漆器の歴史や道具、作品を紹介しています。



うるわし館 / 和歌山県海南市船尾222

オリジナルの作家漆器も評判

漆芸家・林克彦さんの作品「瓢箪の盃」。木地はもちろん本物のヒョウタン。地場産にこだわって天然素材を探し、伝統の技を生かしつつの新たな紀州漆器を模索。「良いも悪いもダイレクトに反応が返ってくるのが職人の仕事。だからこそ、それが緊張感にもなり張り合いにもなります。」と林さん。



瓢箪の盃(写真左)、右はミカンの皮を木地に加工